地蔵尊の宗教 ⑦

国際教養大学特任教授　金岡秀郎

あの世とこの世のあいだを守るほとけ

日本において地蔵尊は、生きている子供には健康な成長を授け、亡くなった子供にはその霊魂を守ると信じられてきた。数ある地蔵尊の功徳の中でも、生死を問わず子供を守ることは、もっとも広く日本人のなかで受容されてきた。

しかし、前回述べたように、地蔵尊に関する経典には、地蔵尊が子供を守る菩薩であるとする記述がない。具体的には、『地蔵本願経』や『閻羅王授記四衆逆修生七往生浄土経』のような伝来経典のみならず、日本で成立した『延命地蔵経』にすら、子供と地蔵尊の関係が見いだされない。

このように表面的には仏教の「ほとけさま」であっても経典的な根拠のない信仰は、日本人の民間信仰の中で生まれ定着していったものが多い。すなわち、「ほとけさま」の背後に日本土着の「かみさま」が潜んでいるということである。こうした思想や信仰は、経典の読解だけでは解明しがたい。それにかわって大きな役割を果たすのは、文化人類学や宗教学など、文献以外の文化現象である口頭伝承や祭祀、造形などを現地調査（フィールドワーク）によって研究する学問である。なかでも日本では、日本独特の学問体系である民俗学が多大な業績をあげてきている。ことに民俗学者による石地蔵の研究は、文献学者には解明しがたい日本固有の地蔵信仰を明らかにしてきた。

先に見た『地蔵和讃』に歌われた賽の河原も、日本独特の思想である。仏教民俗学で優れた研究を残した五来重によれば、賽の河原とは「墓地のような死者の世界と、人間の住む娑婆世界との境界に、霊魂の往来を塞るための積石をした場所」であり、もとは「塞の河原」であったと推定している（『石の宗教』講談社学術文庫）。霊魂の往来を塞るのは積石であったり、また石棒を立てることもあり、それが道祖神の起源となった。その道祖神に顔や袈裟衣を彫刻することによって石地蔵になったという。したがって石地蔵とは、図像や仏画や木彫の地蔵菩薩を石像化したものではなく、もともと石の持つ宗教性が転じて石地蔵になったものと考えられている（同）。また、民俗学者の大島建彦は、境界に「さへのかみ」と呼ばれる神がいて、人々のところに悪霊の入るのを防いでおり、それと道祖神や地蔵尊が習合して日本における複雑な系統の信仰を形成したとしている（大島建彦『道祖神と地蔵』三弥井書店）。

日本人は古来、死者の霊魂を恐れたが、なかでも非業の死者のそれを恐れた。ブッダの教えでは、善き行いをすれば当人に善い結果がもたらされ、悪しき行いをすれば悪しき結果が自らに及ぶとされた。これを善因善果悪因悪果とか因果応報という。業とは行為のことで

八王子市内妙薬寺境内の伝・子育て地蔵尊
摩耗して判読しがたいが舟形光背銘に貞享三（一六八六年）と見える

人を癒す音楽

シャンソン歌手　友納あけみ

暑さ寒さも彼岸まで…言葉通り、陽射しはすっかり春めいて来ました。桜の蕾も心なしか膨らみ、もうすぐ美しい季節がやってきます。

六年前の今頃！北国の人達は厳しい冬の寒さから、やっと解放される日々を待ちわび胸を膨らませていたはず…あの日の震災はそんな人々の夢を無惨に砕いていきました。春を待つ心騒ぐ時が、あの年からは辛く哀しい鎮魂の日になってしまいました。未だに、復興は捗らず、たくさんの重い課題が残されたまま…

そんな東北から、ひとつのドキュメンタリーが届きました。「音楽に何ができますか?」と題されて、仙台フィルハーモニー管弦楽団の団員達が、震災直後から五年に渡って楽器を片手に被災地を回る日々が記録されていました。最初は衣食住も足りてなく、まして家族の安否さえわからない場所に音楽なんて！と何処かやましさと大きな不安を抱えて避難所に向かった団員達も、音楽を聴きながら止めどなく涙を流す人々の姿に！「被災以来初めて、泣いても良いんだよ！と言われた気がした！」「ひと時、苛酷な現実から忘れられ、久しぶりにゆったり息が吸えた気がする・・・」の言葉に！音楽の力に気がつかされていきます。

実は自分達のやっていた音楽には本当に人を癒し、生きる為の心の糧の様なものを与える力があるんだ！音楽をやっていて良かった！自らも被災を経験して、今、生きて音楽ができることの有難さ、それが人の心を動かせる感動…全ては極めて神聖なものの様に思え深く真摯な気持ちで一杯になったそうです。

震災は計り知れない多くのものを奪っていきました。だからこそ、残された私達は、その中から、生きること！命について、それぞれの立場での課題を深く学び、考えなくてはいけない気がしています。季節は春を迎え、多くの自然の恵みがもたらされます。この恵みと同じ様に音楽は神様からの素晴らしい恵み…改めて身の引き締まる想いを感じています。

コンサートのお知らせ

六月十五日(木)
友納あけみコンサート
「讃歌」

会場
渋谷区・さくらホール

時間
開場十八時半
開演十九時

お問合せ先
℡〇三・三五三一・九五〇七

ある。しかし災害や事件・事故を見るまでもなく、現実には立派な人が無残な死に方をすることもある。このような業によらない死を非業の死といい、通常とは異なる悲惨な死を横死という。日本において非業の死者の霊魂は、「祟る」とか「浮かばれない」と信じられ、妖怪となって生者を襲うと恐れられた。それを鎮めるために行ったのが、「祀り」、「調伏」であり「供養」であった。真言宗をはじめ多くの寺院で修される施餓鬼会にも、横死者の供養、鎮魂の意味が含まれている（金岡秀郎『文学・美術に見る仏教の生死観』NHK出版）。本来の仏教では「祟り」を説かぬから、これもまた日本的宗教といってよい。

五来重によれば、定命でない夭折死による子供の死も非業の死であり、その霊は「御霊」として恐れられたという。こうした御霊がこの世に戻ってきて祟りを起こさぬように塞るのは「塞神」としての道祖神の役割であったが、これを地蔵尊、なかでも六地蔵が引き継いだ。こんにち墓地の入り口に六地蔵石仏が立っているのはそのためで、墓地から荒び出る「荒魂」を塞るために置かれた「ガードマン」とされた。こうした役割を持つ六地蔵は高野山奥の院に建立された中世以来、江戸期には各地に立てられ現代に至っている（『石の宗教』）。六地蔵はインドや漢民族の仏教には見られず、日本固有の信仰と考えられているが、六という数字は仏教の説く六道輪廻に基づいている。生きとし生けるものは解脱しない限り、地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人・天の六道を無限に転生し続ける。その六道それぞれで地蔵尊が死者の霊を守り、同時に生者がそうした霊に襲われぬよう願って、遺族たちは墓地の入り口に六地蔵を建立したのである。